

日本列島の東西差における稲作の役割

元 木 靖

I. はじめに

II. 仮説の提示

III. 日本列島における稲作の伝播過程

(1) 稲作伝播の時期的特徴

(2) 稲作東限の停滞理由

IV. 日本列島における稲作の普及・定着過程

(1) 8世紀末頃の稲作地域

(2) 明治初期の稲作地域

(3) 現代の稲作地域

V. 考 察——稲作の役割——

VI. む す び

I. はじめに

わが国の水田稲作農業（以下、稲作と略）は、国民への基本食糧の供給ということと、自然（水・土）環境の保全ということの両面において重要な役割を担っている。また歴史的には、日本人の民族的な根幹の形成に果たしてきた役割が高く評価されてきた^{1),2)}。しかしそれらに加えて、あるいはそれら以上に、稲作の発展が国土の統一性に与えた役割が強調されるべきではないだろうか。

この報告は稲作の果たしてきた多様な役割のうち、こうした側面を主張するためのささやかな試みである。はじめにこうした主張の基本的な視点について述べ、ついで日本列島への稲作の広がり方を概観し、最後に若干の考察を行なった。しかしながら、内容的にはきわめて不十分なままであることを断っておきたい。あえてこの発表を意図したのは、今日の稲作の置かれた困難な状況に対して、その役割を地理学の立場からも再考して見るのが、いま、きわめて

大切であると考えたためである。

II. 仮説の提示

東京と大阪、あるいは関東と関西という2つの中心地域は、わが国の政治や経済・文化を考えるととき常に注目され、比較されてきたことは言うまでもない。しかし、この両者の背後にあってより大きな対照をなしているものは、大まかには中部地方を境とする³⁾、東北日本と西南日本という歴史を貫いて存在する地域差^{4),5)}（以下、東西差と略）である。近年、こうした日本列島の東西差の問題について、自然と人文の両面から関心をよび、歴史学、地理学、民俗学、文化人類学、その他さまざまな分野からの研究がすすんでいる。そのなかで「東部と西部の対立が、現在でこそ薄くなりつつあるが、かつてはかなり鮮明であった」という指摘⁶⁾、あるいはこの差異が先史時代にまで遡るという見方⁷⁾も提出されている。

一方、しかし、そうした東西の差異を打ち消すようなかたちで存在する空間的特徴に注目する必要がある。それは、大量生産・大量消費の経済に支えられた今日のわれわれの生活空間のことではなく、国土や生活文化にまで深く刻まれた稲作の存在である。しばしば指摘されてきたように、世界的な観点からみた場合の日本列島の土地利用の特色は、森林とともに水田の存在である⁸⁾。玉城・旗手⁹⁾は、日本列島ほど人為的に作り替えられた自然をもつ地域は例が少ないとし、これを「風土」と呼んだが、O. ベルグ¹⁰⁾はさらに水田を「日本の空間を一挙に特徴づけている」「日本性の印」と表象した。筆者は中国の華中・華南の水田地帯と華北・東北

の畑作地帯という対照性を観察して、改めてそうした日本における水田存在の意義を鮮明に印象づけられた経験がある。

本稿の考えは、以上のような日本列島にみられる2つの特徴を結びつけるところから気づいたものである。すなわち、日本列島における東西差の枠組みを前提としてみたとき、稲作の発展は、単に西南日本から東北日本への伝播の問題としてではなく、両者の間に存在した大きな地域差の解消、ひいてはそこに統一性を生み出す意味をもつものであったと考えるべきではないか。あるいは、東西2つの日本を稲作によって1つの日本にする道筋がつけられたとする見方が強調されてもよいのではないだろうか。このような考え方は、すでに見られる。たとえば、江波¹¹⁾が日本の文化的特色は「多様性のなかの統一性、あるいは統一性のなかの多様性」にあるといったときの「統一性」は、稲作のことを念頭においたものであると考えられるし、また宮本¹²⁾は「年中行事以外の民俗についてみるならば、東と西とで差異のあるものは少なくない。そういう差異を徐々に消していったのが稲作の全国的な分布」であると述べている。

しかし、これらの指摘は観念的に言われているにすぎない。この具体的な意味を明確にするには、稲作が国土に広がるプロセスのなかに東西差の影響がどのように表われてくるかを見てゆくことによって、地域差とその克服という関係にアプローチしてみる必要がある。またそれによって、稲作のはたした上述のような役割を主張することが出来るのではないかと考えた。

Ⅲ. 日本列島における稲作の伝播過程

(1) 稲作伝播の時期的特徴

わが国の稲作は、中国大陸から朝鮮半島経由あるいは海上ルート of のいずれかによって、まず最初に北九州に伝えられたことはほぼ疑いない事実であろう。福岡県板付遺跡において発見された炭化米や土器に残されたモミ跡（圧痕）などによって、紀元前3世紀頃の稲作の開始が裏づけられたが、その後全国各地でいわゆる弥生

式土器とともに同様な証拠が発見されたり、また直接水田遺跡が発見され、稲作がわが国に導入されて以来どのようにして各地へ伝えられていったかの様子が詳しく解明されつつある。

杉原¹³⁾によれば、北九州からの稲作伝播の時期は、南九州には約100年で伝えられ、一方、瀬戸内周辺および東北日本には図1に見られる過程をへて、本州北端の青森県田舎館村（垂柳遺跡）には約600年をかけて、紀元後300年頃には到達したと推定されている（図1）。最近では、青森県での稲作の始まりが弥生前期、紀元前2世紀頃まで遡るという見解も見られる¹⁷⁾。一方、稲作伝播にともなう森林破壊の地域性について安田¹⁸⁾は、北九州と東北地方では、平野周辺の丘陵部まで広範な森林破壊が引き起こされた時期に、およそ1000年ほどの隔たりがあるとしている。いずれにせよ、弥生期に稲作は北海道をのぞく本州の各地で始められたことは疑いのないことであろう。佐々木¹⁹⁾は大陸から北九州に伝えられた稲作が、きわめて速いスピードで西日本に伝わったことを指摘し、水田を維持・管理・経営してゆく複雑な技術の体系が、セットとして各地で受容されていったものと想定している。このようなことは、最近の考古学の成果によっても裏づけられつつあるようである²⁰⁾。

しかし、こうした稲作の開始期における日本列島への伝わり方については、一方で地域的にかなりはっきりした時間差をとまっていたとする見方が有力である。すなわち、北九州から東進した稲作は、弥生前期（紀元前100年頃）のうちに伊勢湾沿岸付近までは順調に伝わったものの、伊勢湾以東への伝播は一応停止してしまふ。そしてこれより以東への伝播は、弥生の中後期になって開始される。このような差異は、弥生前期と弥生中・後期の遺跡、あるいは土器様式の分布の地域差をもとに明らかにされている²¹⁾。したがって、日本列島における稲作伝播の大まかな見取り図は、西南日本中心の第一次拡大圏と、東北日本への第二次拡大圏に二分される。

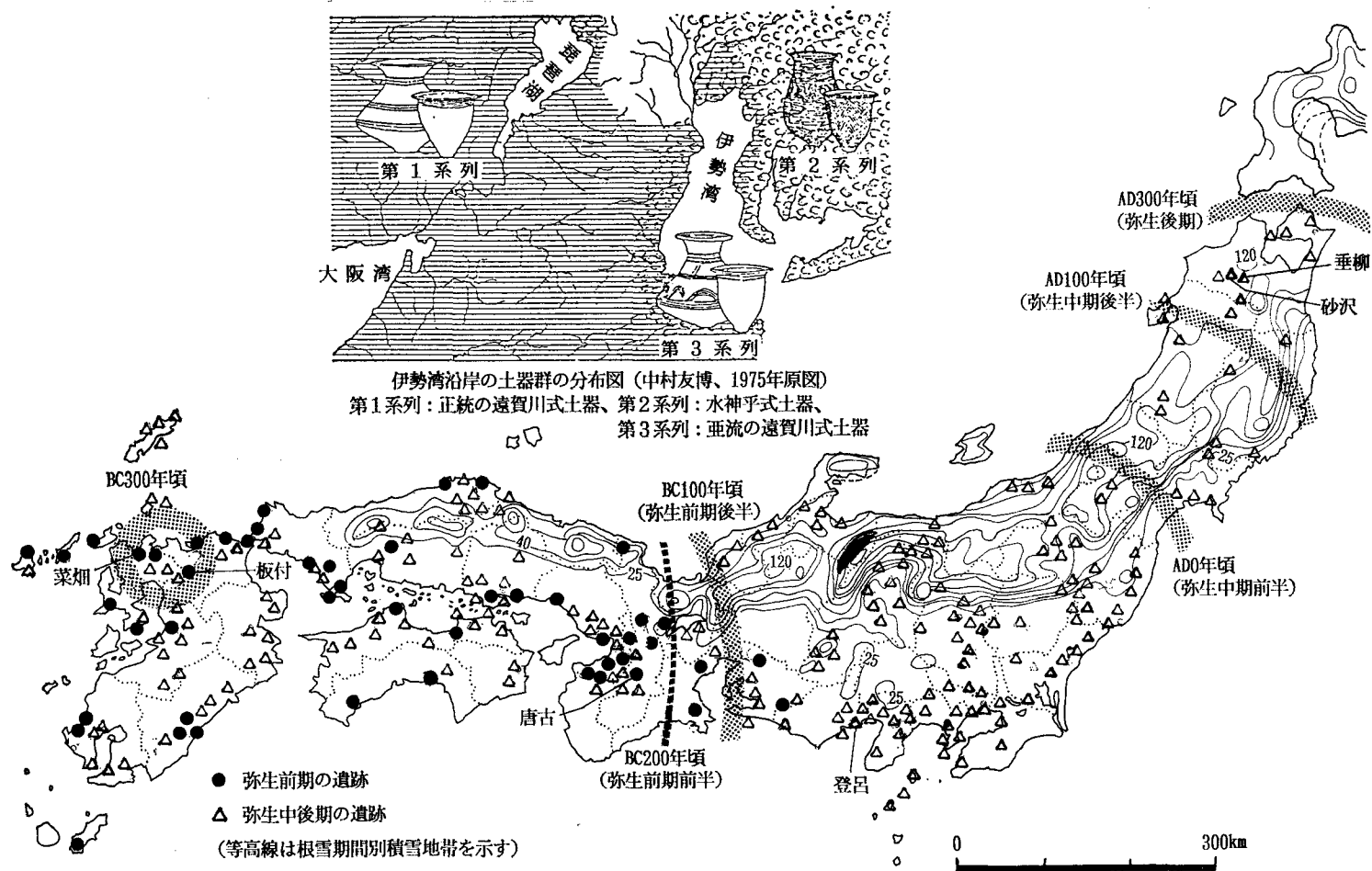


図1 日本列島における稲作伝播状況
(杉原¹³⁾, 林¹⁴⁾, 農業土木歴史研究会¹⁵⁾, 宮出¹⁶⁾などにより編集)

(2) 稲作東限の停滞理由

上述のように、わが国に伝えられた稲作がかなり完成度が高いものであったとすれば、なぜ伝播の時期に東西の差が生じたのであろうか。すなわち弥生前期の稲作の東限が、なぜ比較的長く伊勢湾付近で停滞してしまったのであろうか。これについては大きく2つの見解がある。

第1は、弥生以前の縄文文化の経済的な地域差を根拠とするものである。縄文文化は遺跡数や人口数、さらに亀ヶ岡式土器の爛熟さ、あるいは狩猟用具の質および量のあらゆる面で、東北日本が西南日本に優越していた。その背後には、ブナ林帯と照葉樹林帯という植生環境の差異があったが、採集経済の段階では東北日本が圧倒的にめぐまれ、一方西日本は早くから採集経済の限界にぶつかっていた。こうした経済環境の差が、西南日本では稲作への移行を早め、逆に東北日本ではその受容を遅らせた、という考え方である²²⁾。

北九州から瀬戸内海沿岸を東進した文化は、福岡県白ノ越遺跡、愛媛県阿方・片山遺跡、岡山県門田遺跡、そして愛知県志賀遺跡に見られるようにかなりの貝塚を残しているが²³⁾、これは採集経済の中に稲作が受け入れられたことを示す例となろう。なお、これを補強するものとして、縄文時代の晩・後期に西日本に展開していた照葉樹林型の初期農耕（＝焼畑農耕）の存在が、水田農耕社会への移行に大きな役割を果たしたとする見解²⁴⁾も示されている。

第2は、以上とは全く異なった立場にたつもので、鈴木²⁵⁾や大野²⁶⁾の見解が代表的なものである。鈴木は「植生が異なることによる土地・生態系の適・不適ということではなく、文化圏の異なるところに浸透しなかった」と述べ、大野は「農耕（稲作）社会への転化が一時的には近畿まででとまったことは、亀ヶ岡式土器の点からだけでは説明できない」としたうえで「弥生式前期の時代にはすでに、近畿地方と中部地方には、単に自然の地域的な境界ではない、政治的、人為的な人間の境界が存在していたので

はなかろうか」と推測している。つまり、前者は「文化圏」、後者は「人間の境界」の存在を想定して、稲作の伝播に差異が生じたことを指摘している。ちなみに両者は、東西日本の間には現代にまでおよぶ社会習慣の相違と方言圏の対立をあることを認めている。

以上、日本列島における稲作開始期にあたる弥生期の稲作の伝播の過程について概観し、この段階ですでにかなり明瞭な東西差が存在したことを確認することができた。しかしながら、その理由については、まだ統一した見解がないこともわかった。しかも、縄文の採集経済の地域差あるいは文化圏の地域差のいずれを重視する立場であれ、弥生時代の中・後期からなぜ東北日本にも稲作が伝播していったかにはほとんど触れていない。

IV. 日本列島における稲作の普及・定着過程

以上に概観した稲作伝播の様相は、これまでの考古学的な、遺跡の点的な、成果に基づくものである。したがって、果たして弥生期において、面的には稲作がどのような広がりを見せていたかを知ることはほとんど不可能である。しかし、新野²⁷⁾が述べるように、少なくとも「田舎館の線までひた押しに、同じ密度で東北北部が3世紀はおろか1～2世紀などという時代以来稲作が普及していたかということになると、懐疑的にならざるをえない。否、全然否定的にならざるを得ないというべきであろう」。

それでは、日本列島への稲作の普及はどのようにして進展したのであろうか。そして稲作東限の停滞、および今日までも続くとされる東西差の問題との関わりは、どのように捉えることができるのであろうか。この点を確認するためには、稲作の面的な広がり、さらにはその安定度にも注意してみなければならない。しかし、それを確認できる統計的な資料はきわめて少ない。奈良時代の後半期から延暦時代まで²⁸⁾の間（8世紀末）の田の面積を示すとされる「和名抄」が最初のものである²⁹⁾。そこでここでは、「和名抄」による水田の地域的分布を手始めに、

江戸時代をへたあとの近代初期、および今日の稲作地域の分布を検討してみることとする。

(1) 8世紀末頃の稲作地域

「和名抄」による全国の水田面積は、約86.2万町歩である。これはいまの面積に換算すると103.4万町歩（102.6万ha）で、今日の全国の水田面積の約3分の1に相当する。いま、これらの水田を旧国別の分布図に表わしてみたのが図2である。これによると、わが国に稲作が導入されて約1000年をへた段階での稲作の広がり方を知ることができる。

まず、弥生時代前期に問題となった稲作の東限線を境に水田の分布を見ると、若狭湾—伊勢湾を結ぶ線の以西の西日本に48.2%、以東に51.8%となっており、稲作が大きく東進したことがわかる。とくに、10,000町歩以上の水田をもつ国が中部地方から関東地方に卓越しており、関東では常陸の40,092町歩、武蔵35,574町歩、上野30,937町歩、下野30,155町歩をみせ、上総と下総も合わせると49,278町歩となり、他では陸奥の51,440町歩を除くと近江の33,402町歩、および信濃の30,908町歩をみるにすぎない。もちろん、これは国の面積の差を多分にあらわし

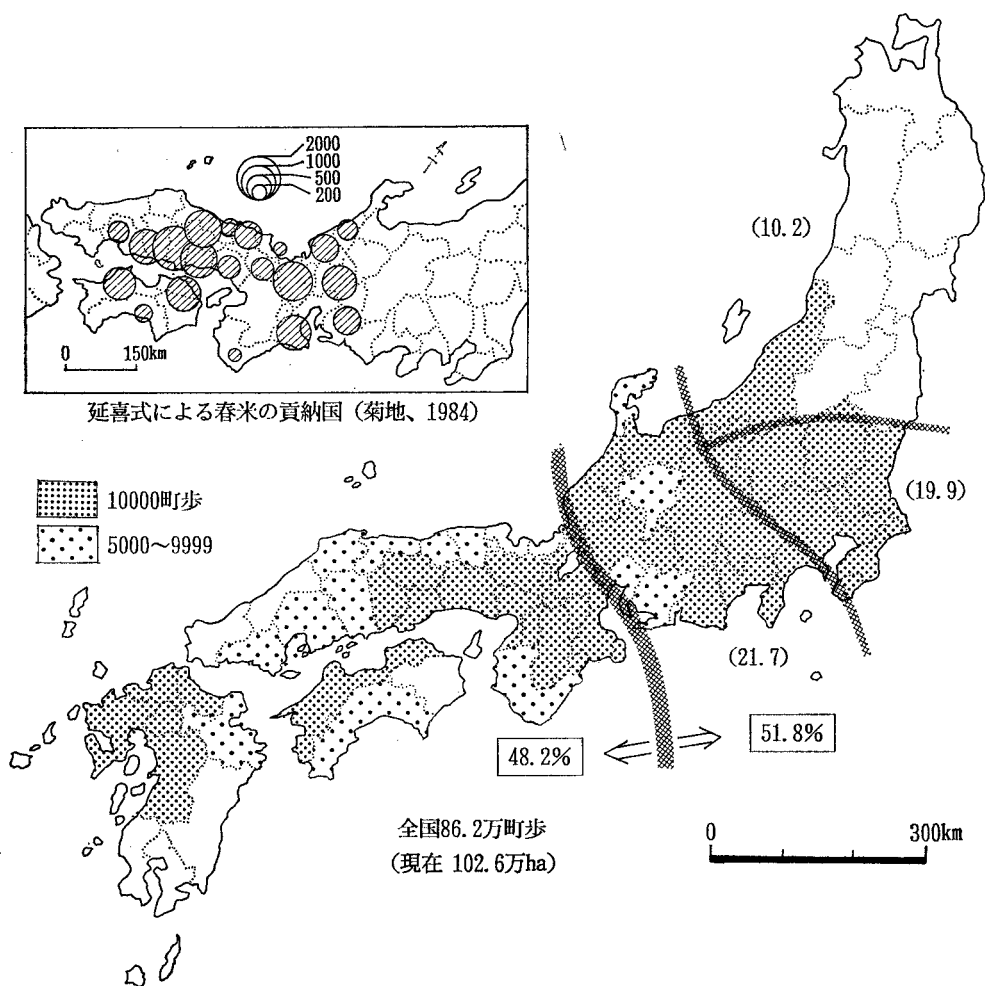


図2 8世紀末頃の稲作地域
（「和名抄」の田の面積により作成）

ており、開発度の差を直接示すものではない。たとえば現在の水田面積に対する割合をみると、陸奥と出羽を合わせると93,058町歩(77,549ha)で、現在の東北の水田の約13%、関東で55%に対して、畿内では60%以上に達していた。

ところで、図2に示したように、水田の地域的な構成は、西日本に中部地方を加えると総面積の70%、さらに関東を加えると90%弱に達する。一方、現在の新潟を含む東北は10%程度を占めるにすぎず、また南九州も少ない。このような分布は、古代に形成された条里の分布ともほぼ類似している。条里制は、水田耕作に基礎

をおく生活様式を保持していた農民を支配し、彼らにそうした土地制度を強制した中央の政治権力が、長い間畿内に位置していたため、古代の先進地において密に分布し、そこから遠ざかるにつれて疎となり、ついに南北の両端にて消滅することが指摘されている²⁹⁾。また当時、国衙から中央に納入された正税のうち、米にした年料の春米の分布圏は、畿内の周辺と瀬戸内沿岸の諸国に集中している³⁰⁾。これらをみると、単に面積の分布に示されたものより、稲作の核心地域はより西側に偏っていたと言えよう。

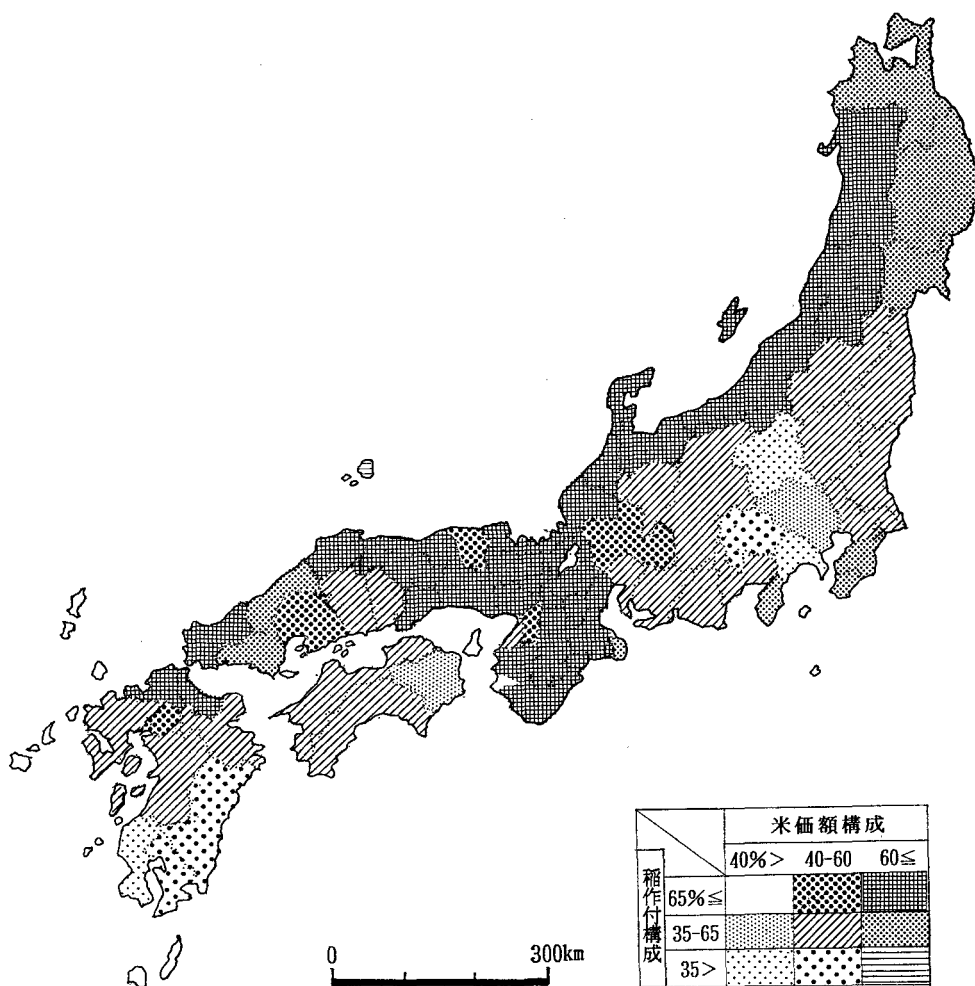


図3 明治初期の稲作地域
(「全国農産表」明治10~12年により作成)

(2) 明治初期の稲作地域

わが国の水田面積の動向は「和名抄」の102.6万haから、明治初期には302万haとなった。この間の増加面積は199.4万haに達するが、そのうち70.4%（140.4万ha）は、大開墾時代といわれる江戸時代に増加した。江戸時代の全国的な開墾の様相についてはすでに様々な研究が成されているので、それらに譲り^{31),32)}、ここではそうした開墾を受けて稲作地域がどのように変化したかをみることにしよう。

図3は、明治初期の稲作地域を、農作物全体のなかでの米の経済的地位、および農作物の作付のべ面積に占める稲の作付面積の地位の、両面を加味して示したものである。これを見ると、畿内を中心として中国および北九州、さらに北陸から東北にかけて主要な稲作地域（米価額構成60%以上、稲作付面積構成65%以上）が形成されていたことがわかる。一方、南九州の日向、大隅、薩摩、また四国の阿波、さらに西関東周辺の上野、武蔵、相模、甲斐などはその対局にあり、米作の地位の低い地域が認められる。

こうした米作の地位が低い地域について検討してみると、阿波の場合、米の作付け構成は59.5%で全国平均（55.2%）に近いが、価額構成では35.5%で全国平均（59.8%）を下回っていた。つまり藍葉が19.1%、麦が18.4%を占め、両者で米を上回る割合を占めていた。日向、薩摩、大隅の場合は、稲作付けの割合がいずれも30%以下で、それゆえ米価額構成も全国水準以下となっている。これらの地域では雑穀が米以上に作付けされ、それらの価額では米と対等の地位を占めていた。西関東の諸国も同様のパターンであったが、ここではいずれも麦類の地位が雑穀を上回っていた。要するに米作の地位の低い地域は、阿波を除くと、畑作が中心の地域である。

ところで、図3を図2と比較してみると、稲作の地域的発展がきわめて著しかったことがわかる。とくに北陸から東北にかけての日本海側の諸国とともに、北東北や中国地方の西部での稲作の発展が注目されるが、このことは稲作が北海道をのぞく全国に普及したことを示したも

のとみてよいであろう。上述のように西関東周辺および南九州を中心に太平洋岸の地域が相対的に米作の地位が低いが、これは稲作が地形や水利などの条件ですでに限界まで開発され、他方で畑作の発展が進んでいたものとみるべきであろう。このように見ると、少なくとも江戸時代を通じて稲作は西南日本から東北日本に至るまでほぼ完全に普及し、稲作立地の東西差が解消されたことがわかる。

したがって、江戸時代における稲作発展がどのような場所で、如何に進展したかを検討することは、従来までの地域差が具体的に何によって規定されてきたかを見るのにもきわめて重要である。しかしこの点は改めて考察のところで触れることとし、その前提となるこの時期の稲作の地域的特徴をもう一点みておこう。それは、稲作地域としての安定性を示す指標となる土地生産性の問題である。

明治初期の水稻の土地生産性の地域的分布を示した図4によれば、全国的にかなり明瞭な地域差が認められる。収量水準が最も高かったのは大和、河内、淡路の諸地域で、1反当り1.6石以上を示していた。しかもその周辺を紀伊、和泉、山城などの1.3～1.6石の地域がとりまき、いわゆる畿内が圧倒的に優位な地位を占めていた。さらに1.0石以上のところが、この周辺の中国と北九州および中部地方の地域に集まっている。これに対し関東から越後を含む東北日本では、南東北の羽前、岩代、磐城で1.0～1.2石の地域がみられるのを除くと、すべて1.0石未満であり、きわめて低い反収に甘んじていたことがわかる。同様な例は南九州と四国の一部にも認められる。

いま、全国の石高を正保2（1645）年および明治6（1873）年の両年で比べてみると³³⁾、約2,329.2万石から3,255.5万石へ、40%近い増加が認められる。しかしこれを、東海以西の西南日本と、中部および北陸以东の東北日本に分けてみると、両者の石高の構成は55.07%：44.97%から52.95%：47.06%に変わっただけで、ほとんど大きな変化は見られない。このことは、

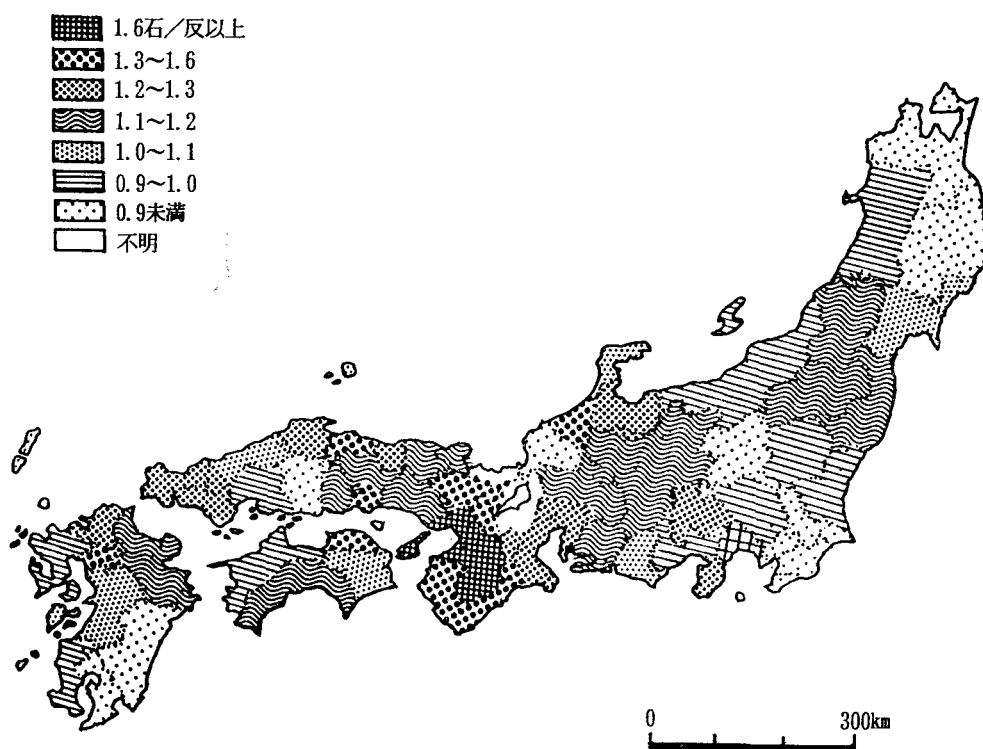


図4 明治初期の水稲反当たり収量の地域差
 (「明治10年全国農産表」等の資料により作成)

表1 東北地方の稲作発展過程 (1883~1985年)

(単位: 千ha, 千t, kg)

発展段階の区分	第 1 段 階		第 2 段 階			第 3 段 階	
発展時期の区分	1 期	2 期	3 期	4 期	5 期	6 期	7 期
水稲作付面積 (a)	442	454	479	517	532	605	587
水稲収穫量 (b)	842	906	1290	1496	1711	2776	3015
10a 収穫量 (c)	189	198	267	287	320	459	514
対 前 時 期 (a)	…	+ 2.7	+ 5.5	+ 7.9	+ 2.9	+13.7	- 3.0
(b)	…	+ 7.6	+42.4	+16.0	+14.4	+62.2	+ 8.6
増 減 率 (%) (c)	…	+ 4.8	+34.8	+ 7.5	+11.5	+43.4	+12.0
対全国割合 (%) (a)	16.7	16.4	16.3	17.0	18.4	19.5	23.6
(b)	15.2	13.9	15.6	16.5	18.9	22.2	26.2
全 国 差 (kg) (c)	-18	-36	-12	-10	+ 9	+57	+51

注1) 時期区分の年代……1期: 1883(明治16)~1895(同28), 2期: 1896(明治29)~1910(同43), 3期: 1911(明治44)~1925(大正14), 4期: 1926(昭和元)~1940(同15), 5期: 1941(昭和16)~1955(同30), 6期: 1956(昭和31)~1970(同45), 7期: 1971(昭和46)~1985(同60)

2) 「日本農業基礎統計」(加用信文監修) および「作物統計」により作成

3) 元木(1991)より引用

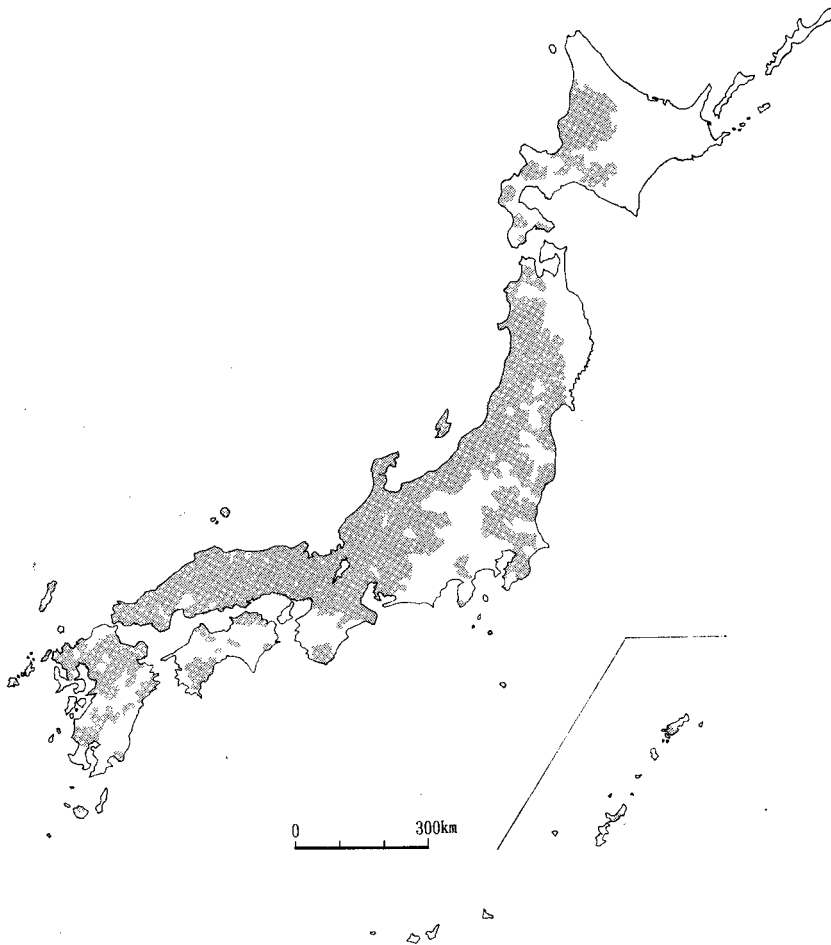


図5 現在の稲作地域
農業粗生産額中米を第一位とする市町村の分布, 1980年
(「生産農業所得統計」により作成)

稲作がはっきりと東北日本に普及したとはいえ、その安定度の面からは大きな東西差があったことを意味する。

(3) 現在の稲作地域

稲作の安定性という面から見て、東西差が解消されるのは近代以降のことである。東北地方の例でみると、表1に示したように、第二次世界大戦前後に変化の徴候が見られ、戦後になって全国水準を凌駕するようになる³⁴⁾。これは、近代以降の寒冷地稲作の技術的進歩によるところが大きかったことは言うまでもない。寒冷地

稲作技術の確立は、明治以降に開拓がすすむ北海道の稲作を支える大きな条件となった。しかしこのような技術が具体化し、寒冷地の稲作が安定するためには、水田自体の整備と水利の改善があったこともきわめて重要なことである。言いかえれば、東北日本の気候と土地条件が相まって稲作の東北進を制限したと言えるが、これについては改めて後述する。

さて、ここで現在の稲作地域を詳しく見るために、全国の市町村を単位として、農業粗生産額の中で、米が第1位のところを抜き出してみたのが図5である。この図は、わが国の稲作が

列島の西南部と東北部に関係なく、普及・定着していることを表わしている。概して、日本海側には連続的で、太平洋側には断続的な分布が見られる。太平洋側では空白の部分が見られるが、これは北海道東部の乳用牛、北東北の乳用牛、肉用牛、鶏、南九州の肉用牛と鶏などの生産地帯、および弘前、長野、甲府盆地をはじめ西南日本におよぶ果樹地帯、静岡の茶、西関東や福島、山梨、長野の蕎麦、さらに都市近郊の野菜生産地帯を構成する市町村が含まれている。これらのうちには、かつて稲作を営んでいたところで、現在は都市化や減反政策を背景として、稲作からの転換を進めたところも少なくない。しかしながら、これらの市町村のうち、北海道東部などの一部を除くと、まったく水田をもたないところはきわめて少ない。

V. 考 察——稲作の役割——

これまでのⅢ章およびⅣ章を通じて、紀元前3世紀頃に北九州に稲作が伝えられてから、少なくとも600年後の紀元3世紀頃には本州の北端まで伝播した稲作が、その間にあって東西日本の接点において停滞したことについて注目してみた。さらにその後の本格的な普及過程においても、東西差の境界はわずかに東に移動したものの、基本的にはかなり長期にわたって貫徹してきたことがわかった。

わが国において稲作が不動の基礎を築いたとされる8世紀末頃の段階でさえ、稲作地域の実質的な分布は、面積からみて新潟と東北あわせて全国の10%強を占めていたにすぎない。近世をへてようやく東北日本への普及は達成される。しかしながら、この場合でも、収量水準などからみると、明らかに西南日本が安定し、東北日本が不安定という構図が明瞭であった。このようなことから、日本列島においては、稲作開始期の、いわば点的な伝播はきわめて速かったかにみえるが、その本格的な普及・定着という面からみると、まさに2000年の時間を要したといえよう。これは正確に言えば、東北日本における稲作の普及・定着に要した時間であって、南

九州などを除く西南日本のそれは、この半分あるいはそれ以下と見てもよいであろう。

それでは、なぜ東北日本への稲作の本格的な展開が遅れたのであろうか。稲作開始期の稲作東限の停滞の理由としてあげられた東北日本の縄文文化の優位論、あるいは文化圏の差による説明は、たとえそうした事実を認めるとしても、もはや歴史時代の説明のためにはほとんど意味をなさない。すなわち、これまでに行われた開田史や稲作の研究成果によってみるならば、東北日本への稲作を制約し続けてきたのは、生態学的な要因であったと断言できよう。問題は、気候あるいはそれを反映した植生の地域差に着目して理解すべきか、それとも具体的な立地に関わる土地条件の面から考えるべきかという点である。この点は、これまで明確には判別されてこなかったように思われる。しかし、結論的には、後者のもつ意味がきわめて大きかったものと推察される。

気候条件と稲作展開の制約との関連は、これまでかなり強調されすぎた感がある。たしかに日本列島には、西南日本の照葉樹林帯と東北日本のブナ林帯という見事な対照が見られる³⁵⁾。したがって、この面から、熱帯あるいは亜熱帯性の植物である稲が寒冷な気候条件をもつブナ林帯への展開を制約されてきたとする理解³⁶⁾は、大局的には間違いではないであろう。

しかしこの立場から理解しようとする、すでに見たように、稲作開始期に点的ではあれ、稲作が東北の青森まで伝播していること、あるいは弥生期の遺跡や条里の遺跡の分布などが、日本海側より稲作にとっては厳しい気候環境下にある太平洋側に意外に多い傾向があるなど、例外が目立ってしまう。しかもわが国の稲作は夏季のモンスーンを前提として発展してきたことを重要視しなければならない³⁷⁾。すなわち、気候的には九州から北海道まで、潜在的に稲作が成立する可能性があったことを想定することもあるのである。稲作の国土への立地展開を考えるには、植生分布の地域差とは異なった環境を想定しておかねばならない。要するに、こ

のようなことから、東北日本の気候条件が稲作の東進を制約する重要な条件の一つであったことは間違いないとしても、その決定的な制約条件とはなっていないのではないだろうか。

これに対して、土地条件の場合、かなり決定的な意味をもっていたであろう。稲作が地域的に受容されていく具体的かつ客観的な条件として、社会的な状況、技術的な段階、土地条件を考えてみると、仮に前二者が条件をみたしたとしても、自然の土地条件が不適切であれば、水稻以外のものが選ばれてしまう³⁹⁾。稲作にとっての具体的な土地条件は、開田に関する多くの研究によって明らかのように、広い意味で低湿地であった。もちろん低湿地³⁹⁾といっても、谷地、氾濫原、湖沼、干潟など条件は大きく相違するが、開発に際しての人間の近づきやすさからいえば、基本的には小規模な低地から大規模な低湿地へと開発されてきた。

これまで低湿地開発について、2つのことが明らかにされている。その一つは、前述のように稲作が東北日本にも本格的に普及した、いわゆる大開拓時代は、広大な低湿地が新しい技術によって全面的に開田されたところに最も大きな特徴が認められること⁴⁰⁾、もう一つは、日本列島の地形配置には、山地、海岸、平野などの面から見て、明瞭な東西差（敦賀―伊吹―鈴鹿山地を境界）が存在するうえ⁴¹⁾、沖積平野自体が西南日本には小規模で、東北日本には大規模な特色を形成していること、である⁴²⁾。高木⁴³⁾は「中部日本を含む東日本の沖積平野は、中流域に排水良好な扇状地性低地からなる土地、下流域に排水不良の氾濫原・三角州性低地で湿地や沼沢地、ときには潟湖のような水面からなる特徴を示す。これに対し西日本の平野は、もっぱら排水不良の氾濫原、三角州低地とその全面に発達する潮汐平地を特徴とする」と述べ、こうした地形配置と耕地開発との関係について、東日本と西日本との間で通時的な開発様式の差が見られることを描き出している。

このように、東北日本の低湿地は大きな制約条件となってきたことが指摘されているが、い

かに人間の近づきにくい土地であったかについては、蒲原平野を例として詳細な研究がなされている⁴⁴⁾。しかもここでは、開発後も不安定な稲作が見られたことは前掲の図4によっても明らかであり、その安定化は近代以降の耕地整理まで待たねばならなかった⁴⁵⁾。したがって、治水や灌漑技術が未発達であった古代の段階では、開発は大きく取り残されていた。山田⁴⁶⁾は、大規模な沼沢地と低湿地帯を含む宮城県仙北平野において、そのような場所は律令体制の基礎となった水田耕作に好適な場所ではなかったことを明らかにしている。なお、北海道はじめ北日本の各平野の低湿地は、広い範囲にわたって泥炭地が存在することも注目されねばならない。

以上から、西南日本から東北日本への稲作の普及・定着に大きな制約要因となってきたものは、地形的あるいは土地的条件の差異であったとみてよいのではないだろうか。その意味で、西南日本の水田の開発を溜池技術に対応させ、東北日本のそれを河川開発技術に対応させてみる見方はきわめて有効であろう⁴⁷⁾。つまり、比較的小さな平野の西南日本は早くから開発の対象となったのに対して、東北日本はそれらと類似の地形は点的に開発が進んだものの、大平野の治水を前提にした開発は、常に大きな期待はあったものの、容易には達成されなかった。

なお、ここで若干付け加えると、養老6(722)年政府は100万町歩の開墾計画を発表したものの、結局計画だおれになったことの一因は、こうした対象地の開発が困難なためではなかったであろうか。また中世に至って西南日本から中部地方にかけて、棚田の開発が進んだことが指摘されているが、上述のような地域差を考慮すると、棚田は広大な低湿空間の開発が不可能であった時期の開発の特徴とはみられないだろうか。

いずれにせよ、以上のように見ると、日本列島における東西差とくに土地条件のそれは、稲作の展開にも大きく立ちはだかってきた。しかし結果的に稲作を通じてそれが克服され、列島内に統一的な平野の空間を生み出してきたこと

の意義は、大きく強調されるべきことではなかろうか。それは前述の夏季のモンスーンを巧みに利用しつつ、低湿地の景観を全国的に共通のものに変えてきたところに、稲作の大きな役割を見出すことができるのである。

VI. むすび

稲作の最も大きな役割が、日本列島における東西差を解消し、国土に統一的な基盤を与えた点にあるとの観点にたち、稲作導入以来の国土への稲作の広がりプロセスを大観した。以上の考察結果にも明らかなように、稲作が国土に定着したことの意義は、夏季のモンスーン気候を活用し、低湿な国土の土地環境を生産および居住の場とするシステムを作りあげたことにあると言えよう。

この報告は、多くの先学の研究成果を、筆者なりの視点と材料で整理して得られた一応の結論にすぎない。このような研究ノートの報告を意図したのは、初めに述べたようにいまわが国における稲作の役割を地理学の立場から明らかにすることが、きわめて大切なことであると考えたためであった。しかしどれだけその目的が達せられたかを考えると、まだその出発点にたったにすぎないというのが実感である。今後は、上述のような稲作の役割を、これからの国土における土地環境と人間生活との関係を展望する中で評価してみることが期待されよう。

(埼玉大学教養部)

〔注〕

- 1) 石田英一郎(1986): 日本文化の条件と可能性(梅棹忠夫・多田道太郎編『日本文化の構造』講談社) 15~27頁。
- 2) 江上波夫(1989): まえがき(江上波夫編『民族の世界史2 日本民族と日本文化』山川出版社) 1~12頁。
- 3) 大林太良(1990): 『東と西 海と山—日本の文化の領域—』小学館。
- 4) 網野善彦(1981): 東日本と西日本(吉田公彦編『東日本と西日本』日本エディタースクール出版部) 281~295頁。
- 5) 鈴木秀夫(1989): 列島の自然と生活文化のかたち(江上波夫編『民族の世界史2 日本民族と日本文化』山川出版社) 4~27頁。
- 6) 大野 晋(1981): 日本の東部と西部と(吉田公彦編『東日本と西日本』日本エディタースクール出版部) 253~280頁。
- 7) 安田喜憲(1980): 『環境考古学事始』日本放送出版協会。
- 8) 渡辺 光(1973): 総説(渡辺 光編『世界地理16 日本I』朝倉書店) 1~124頁。
- 9) 玉城 哲・旗手 勲(1974): 『風土—大地と人間の歴史—』平凡社。
- 10) Augustin Berque (1982): *Vivre L'espace au Japon, Presses Universitaires de France* (宮原 信訳『空間の日本文化』筑摩書房, 1985)。
- 11) 前掲2)
- 12) 宮本常一(1963): 民俗からみた日本の東と西(『国文学解釈と鑑賞 特集 日本の東と西』至文堂) 91~101頁。
- 13) 杉原荘介(1977): 『日本農耕社会の形成』吉川弘文館。
- 14) 林 謙作(1986): 亀ヶ岡と遠賀川(『岩波講座日本考古学5 文化と地域性』岩波書店) 93~124頁。
- 15) 農業土木歴史研究会編(1988): 『大地への刻印』公共事業通信社。
- 16) 宮出秀雄(1953): 『積雪寒冷単位地帯農業論』農林統計協会。
- 17) 伊東信雄(1984): 青森県における稲作農耕文化の形成, 東北学院大学東北文化研究所紀要, 16, 1~26頁。
- 18) 前掲7)
- 19) 佐々木高明(1983): 稲作以前の生業と生活(『日本民俗文化大系 第3巻 稲と鉄—さまざまな王権の基盤』小学館) 57~130頁。
- 20) 日本考古学協会編(1991): 『シンポジウム 日本における稲作農耕の起源と展開』学生社。
- 21) 前掲14)
- 22) 旗手 勲(1976): 『米の語る日本の歴史』そしえて。
- 23) 前掲12)
- 24) ≪初期的農耕社会≫の内部では山麓や丘陵の緩斜面などに、雨の少ない年には畑地となり、

- 雨の多い年には水田となるような粗野で小規模な天水田がつくられていた可能性も大きい(前掲12)。
- 25) 鈴木秀夫(1978):『森林の思考 砂漠の思考』日本放送出版協会。
- 26) 前掲6)
- 27) 新野直吉(1981):古代東北における非農耕的遺制,東北学院大学東北文化研究所紀要,12,17~34頁。
- 28) 安藤によれば,「和名抄」の田面積は平安末期に編集されたとしても,必ずしも平安朝時代ものを示すものではなく,むしろ班田制の定期的に行われた奈良朝時代の概数が基礎となり,これに延暦時代の断簡の数字によって訂正されてできあがったものであろう。(安藤広太郎(1951):『日本古代稲作史雑考』地球出版)。
- 29) 谷岡武雄(1963):『平野の地理』古今書院。
- 30) 菊地利夫(1984):『日本歴史地理概説』古今書院。
- 31) 菊地利夫(1977):『新田開発 改訂増補』古今書院。
- 32) 福田 徹(1986):『近世新田とその源流』古今書院。
- 33) 前掲31)
- 34) 元木 靖(1991):東北地方の稲作地域(農業地域システム研究会編『日本の農業地域システム』大明堂)55~69頁。
- 35) 前掲7)
- 36) 前掲7)
- 37) 飯塚浩二(1943):豊葦原の瑞穂の国としてのわが国土,地理学11(1),30~41頁。
- 38) 高木勇夫(1984):水と歴史的地形—地形配置からみた水と耕地開発—(山田安彦編『地域の科学』古今書院)62~108頁。
- 39) 籠瀬良明(1972):『低湿地—その開発と変容—』古今書院。
- 40) 木村 礎(1991):大景観の変貌(日本村落史講座編集委員会編『日本村落史講座第3巻 景観2 近世・近現代』雄山閣)3~22頁。
- 41) 中山正民(1992):地形環境からみた東北日本と西南日本—自然環境認識の手段として—,歴史地理学,157,8~23頁。
- 42) 小出 博(1973):『日本の国土—自然と開発—』東京大学出版会。
- 43) 高木勇夫(1985):『条里地域の自然環境』古今書院。
- 44) 古島敏雄(1967):『土地に刻まれた歴史』岩波書店。
- 45) 白井義彦(1972):『日本の耕地整備』大明堂。
- 46) 山田安彦(1976):『古代東北のフロンティア』古今書院。
- 47) 中山正民(1989):川を通して平野と人間のかかわりをみると—東北日本と,西南日本の大きなちがいは—,自然と人間を結ぶ,2月号,63~69頁。

THE ROLE OF RICE CULTURE IN JAPANESE EAST-WEST DIFFERENCES

Yasushi MOTOKI

Diversified Functions have already been cited regarding the role of paddy rice cultivation in Japan. These include “the formation of a national foundation, a source of staple food, and land conservation.” In addition to these, rice cultivation has contributed to the elimination of domestic regional differences, especially natural and cultural differences between northeastern and southwestern Japan, and to the establishment of a unified society. In this paper I insisted that these facts should be emphasized. Mr. O. Berque, a Frenchman, characterized the paddy field, the basis of rice cultivation, as “a symbol of Japanese tradition that characterizes Japan’s environment.” This concept can be explained more specifically by assessing the diffusion of rice cultivation (paddy field) in

Japan within the framework of domestic east-west differences, or by examining the existence of two discrete Japans.

In developing the above statement, I have summarized the diffusion of rice cultivation throughout Japan, including my viewpoint regarding east-west differences. What Mr. Berque calls a "symbol of Japanese tradition" and the formation of Mr. Tamaki's "climate" are in actuality indications of a process of conquering regional differences that has been implemented during two thousand years. More specifically views concerning the initial period of rice cultivation in Japan (the diffusion of rice growing in the Yayoi period), and the issues concerning the easternmost limit of rice cultivation, require adjustment. Furthermore, I investigated the developmental process in terms of the regional distribution of rice cultivation up to the present day. Based on the above, I considered the period during which rice cultivation was established throughout the country, and also conditions that limited its establishment.

In conclusion, the specific role of rice growing, in terms of means to eliminate domestic east-west differences, became distinctive after the Edo period when rice cultivation was widely diffused and prevalent in northeastern Japan. The Edo period flourished after Japan entered its modernization period. As for the direct conditions that limited the diffusion and fixation of rice cultivation on a national scale, northeastern Japan's cold climate was mentioned. A condition that was indicated, however, as more significant than the above factor, was the region's remarkable geographical environment. The low and humid environment that had existed in the area's lower reaches of huge rivers was transformed. This was a major factor that helped to spur the diffusion and consolidation of rice growing. Territorial unification obtained through rice cultivation was realized by means of the development and maintenance of alluvial lowlands, which are the key environmental necessities for paddy fields.

Finally, the number of farms is now decreasing and the survivability of paddy fields is in question. This is largely attributable to the economic internationalization that is advancing in the aftermath of the high-economic-growth period. For assessing future land-development prospects, it is important to confirm the role and *raison d'être* of rice cultivation, which is the only integral element in this diversified territorial environment.